

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530634

研究課題名(和文) 生業視点からみた現代山村におけるコミュニティ環境の分析

研究課題名(英文) Analysis of subsistence activities in a modern mountain community environment

研究代表者

牧野 厚史 (Makino, Atsushi)

熊本大学・文学部・教授

研究者番号：10359268

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：高齢化と人口減少に直面している現代山村コミュニティにおける住民の生活維持の工夫を、自然環境の生業的利用という視点からあきらかにしようと試みた。九州脊梁山脈の山村コミュニティを事例として、空中写真を用いた写真判読、インタビュー調査、T型集落点検を実施し、自然資源利用の変遷の実態を把握するとともに小規模な家族農業の役割について分析を行った。分析の結果、高齢化と人口減少に直面する山村コミュニティにおいては、自分たちの世帯と家族の生活維持のために行ってきた山村農業が自然環境の持続的な利用において重要な役割を果たしていることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：Sustainable utilization of natural resources by rural communities is central to ensuring the continued well-being of these communities in Japanese rural areas. We examined how the residents of several mountain communities utilized natural resources to continue living in these areas and how they overcome the difficulties associated with rapidly aging and declining populations. To achieve this, we examined aerial photos and conducted interview surveys and T-type community analyses in several communities in the mountainous areas of Kyushu, Japan. Based on the data obtained from these case studies, we clarified the living environments of the communities in these areas and assessed the role of small-scale family farming in sustaining these populations. Our findings showed that subsistence farming played a central role in the well-being of these rapidly aging mountain communities.

研究分野：農村社会学、環境社会学

キーワード：コミュニティ環境 農的自然 山村 農的自然

1. 研究開始当初の背景

農村においては、周囲の自然資源の適切な利用が生活の持続可能性を高める重要な鍵となる。山村の場合でいえば、それは山という自然資源についての利用になる。しかし、経済活動としての林業の衰退もあって、山を含めた現代山村の自然資源利用に関する研究はかならずしも活発とはいえない。他方、住民の高齢化や人口減少による集落消滅の危機が大きな関心を集めるようになってきている。このような山村研究の現状に対し、環境社会学の観点も加味して現代山村を共同で社会学者が調査したとしたら、生活の持続可能性がどのようにみえてくるかという関心から本研究は始まった。

2. 研究の目的

本研究では、列島における山村のコミュニティ環境の多様性を意識し、九州脊梁山脈の山村、ことに大字レベルでのコミュニティにおける自然資源利用と生活実態に主な関心をおいた。その上で、以下の2点をあきらかにすることを目標として研究を進めた。現代の山村における住民の自然資源の利用を実地で観察し、その実態を生活変遷の中に置き直すことで、高齢化や人口減少に対応する生活上の工夫をできるだけ多く抽出すること。本研究の主テーマである山村住民の能動性・主体性という観点から、現代山村生活の存続条件を可能な限り多く見つけ出すこと、の2点である。

3. 研究の方法

現代山村の調査では、高齢化と人口減少によって集落生活そのものが危機に瀕しているという考え方で取り込まれることが多い。そのため、往々にして住民生活の現状分析に限定される傾向が強くなっている。

これに対して、生業に視点をおく本研究では、戦後から現在までのやや長期間の自然資源利用の変化や、近隣の他出した子ども達と住民との関係を視野にいれることにした。具体的には、それぞれの研究分担者の習熟している調査手法に、航空写真を用いたベースマップ作成とその活用を加味する方法をとった。航空写真を準備した上で植生判読を試み、焼き畑地域における戦後の土地利用変遷についての概要を掴むことにしたのである。さらに行政等の資料が準備可能な地域では、これらの資料も入手し活用することにした。

村レベルの資源利用については研究分担者の藤村、個々の家＝世帯レベルの資源利用は牧野(研究代表者)、T型集落点検と現代山村の集落分析は研究分担者の徳野の指導の下に行うという体制を構築した。この体制の下で佐賀県、熊本県、大分県、宮崎県の山村集落でそれぞれ調査を実施し、以下のような結果を得た。

4. 研究成果

(1) 航空写真の分析

航空写真を用いた植生判読については佐賀大学において行ない、主に、佐賀県旧富士町、宮崎県諸塚村の村落の写真の分析を行った。その結果、前者は戦後の人工造林と高度経済成長期以降のダム建設によって山の土地利用が大きく変化したことがうかがえた。また宮崎県の例では、焼畑から常設の水田に変化するにともなって、山に植林がなされていったこと、時代によって川の流れも変化していることが読み取れた。一方、白黒写真による樹種までの判別は季節の変動もあってかなり難しいこと、さらに、広域的な概況を把握するには航空写真は適しているが「むら」や「家」というレベルでの詳細な資源利用情報の入手についてはヒアリングの方が住民とコミュニケーションが図りやすいこと、航空写真の利用は、森林等の土地利用よりも河川や道路等の変化の方が判別しやすいことなどが分かった。すなわち、自然資源利用を写真判読によって解明することには様々な課題があるものの、焼き畑から水田へという通説でも指摘されてきた結果を裏付ける成果を得たことは重要である。

(2) 村落レベルでの自然資源利用

並行して実施した集落住民からのヒアリングおよび文献による分析、T型集落点検からは、現代山村生活における農業の位置、さらには、山村における農的な自然利用と山の資源利用との連動性について、村落ごとに様々なパターンを知ることができた。その中で注目されるのは、田や畑、採集などの「農的営み」である。山村の農業については森林の経済的価値が戦後大きくなったことから、焼き畑などの歴史的な研究を除けば、それほど関心が払われてきたとはいえない。だが、住民の生活から見れば事態はむしろ逆で、食糧確保のための農業との兼ね合いで山の使い方を選んできたという一面がある。たとえば、宮崎県諸塚村や熊本県多良木町の山間部の集落など焼き畑を行ってきた地域がそのような地域に該当する。それらの地域では、焼き畑、薪炭生産から林業施業地形成へという流れで山の使い方を変えてきた一方、林業施業地造成と並行しながら主穀生産のための低地への田の開田を積極的に進めた経緯がある。焼き畑から水田と畑作への転換は、人口減少と高齢化に直面する現代山村の人々の自給的な農業にとってむしろプラスの機能をもつことがわかった。

(3) 成果の意義と今後の課題

以上のように、現代山村が直面している人口減少及び高齢化と住民による自然資源利用の変遷との関連性の一端があきらかにされたと言える。また、徳野の指導の下に実施されたT型集落点検では、集落住民の居住持続への意欲の高さや他出した子との関係の重要性が改めて浮き彫りになった。

上記の二側面を媒介するのが“農”，という生業を基軸とした住民のコミュニティ環境利用である。もちろん、焼き畑等の歴史性については、さらに詳細な研究が必要である。また、航空写真利用の可能性を発展させることも今後の課題である。しかしながら、焼き畑や林業、さらには狩猟や野草利用等のマイナーサブシステムなど、領域毎に行われてきた山村の自然資源利用研究を山村生活の維持可能性と結びつけて検討する方向を示した点が本研究の成果である。

研究分担者である徳野の農業論に即していえば、現代の九州脊梁山脈の山村地域は、高齢者の世帯員が、他出した子との関係を維持しつつ行う「生活農業」の卓越地域ということも可能である。この状況が生じたのは、農を基軸とした山村の人々のコミュニティ環境利用の刷新の結果である。試行錯誤を含む環境利用の刷新の持続が、T型集落点検において、この集落は住みよいと思う、あるいは、将来もずっとこの集落に住み続けたいという希望を住民が語る生活実態上の一つの根拠となっていると考えられる。

(4) 成果の公表

これらの知見をもとに、研究代表者の牧野は、第72回西日本社会学会大会(西南学院大学)において「“農的自然”の可能性 生業、観光、食と農」と題するシンポジウムを行い(分担者の藤村はシンポジウムで報告)その成果をもとに『西日本社会学会年報』において特集を編集した。さらに、研究分担者の徳野貞雄の監修の下に『暮らしの視点からの地方再生』を出版し成果の一部を公表した。

<引用文献>

徳野貞雄, 2011『生活農業論』学文社。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

藤村美穂, 2015「現代山村における農的自然 コモンズ論との対話」『西日本社会学会年報』13.7-18。(査読有)

牧野厚史, 2015「今なぜ“農的自然”か」『西日本社会学会年報』13.1-5。

[学会発表](計3件)

2014年5月11日, 牧野厚史, 「今、なぜ“農的自然”か?」西日本社会学会第72回大会学会シンポジウム: “農的自然”の可能性(於西南学院大学)。

2014年5月11日, 藤村美穂, 「山村生業の現代的展開と農的自然」西日本社会学会第72回大会シンポジウム: 西日本社会学会第72回大会学会シンポジウム: “農的自然”の可能性(於西南学院大学)。

3 September 2014, A. Makino, “Water problems in countries blessed with

abundant water-Natural drinking water in Japan's rural communities”. The 5th International Conference of the Asian Rural Sociological Association (ARSA), National University of Laos, Vientiane, Laos, 2-5 September 2014.

[図書](計1件)

牧野厚史・松本貴文編著(徳野貞雄監修), 2015『暮らしの視点からの地方再生』九州大学出版。

牧野厚史, 2015「農業と環境 環境論としての生活農業論の可能性」牧野厚史・松本貴文編, 2015『暮らしの視点からの地方再生』九州大学出版. 62-84.

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

牧野 厚史(MAKINO Atsushi)
熊本大学・文学部・教授

研究者番号: 10359268

(2) 研究分担者

徳野 貞雄(TOKUNO Sadao)
熊本大学・文学部・教授

研究者番号: 40197877

藤村 美穂(FUJIMURA Miho)
佐賀大学・農学部・准教授

研究者番号: 60301355

(3)連携研究者

佐藤宣子 (SATO Nobuko)
九州大学・(連合)農学研究科(研究院)・
教授

研究者番号 : 80253516